

# 近藤徳子 「紫雲殿」社長 インタビュー

愛知県内 21 カ所で斎場を運営する葬祭業社、セレモニーホール「紫雲殿」（本社・名古屋市瑞穂区）は創業 100 周年の節目を越えた。葬儀の歴史、伝統の意味を考えつつ真心のこもった「最後のお別れ」の場を提供し続けている。このほど、3 代目の社長に就任した近藤徳子氏に紫雲殿の特徴、葬儀運営に込めた思いなどを語ってもらった。



## 儀式の本質を追求し、創業100年越え。故人の思いを代弁も

—創業 100 周年、おめでとうございます。

**近藤徳子社長** 創業は大正 13(1924)年 5 月で、昨年、100 周年のパーティーを開催させていただきました。葬祭業を名古屋市瑞穂区で始めたのは、地元のニーズによるものと聞いています。日露戦争などで亡くなられた兵隊さんは遺骨が入っていない空の箱で帰宅され、葬儀をすることで遺族の方に供養していただいたようです。当時は町にいくつもの葬儀業者がいましたが、その後減少。弊社は今年が 101 年目になりますが、伝統ある葬儀会社として困った方の手助けをしたい、との思いは当時から変わっていません。100 周年を機に私が 3 代目の社長に就任させていただきました。

—会社組織になった時期、現在の斎場数は。

**近藤社長** 当初は三輪葬儀で、昭和 54 (1979) 年に法人化し、その後「株式会社三輪本店」に変更しました。斎場は名古屋市を中心に愛知県内 21 カ所で展開しています。

—広く展開してこられた要因は。

**近藤社長** 地元の要請に応じてきたのが 1 番ですね。社会的な要請といえますか、地元の方からいろんな情報を伺い、出店希望を受けて弊社がそれに応えてきました。

—葬儀のニーズは変わりましたか。

**近藤社長** 今の時代、最も分かりやすい葬儀の形態が家族葬ですよ。コロナ禍以降大変増えまして、一般葬と呼ばれる葬儀が本当に少なくなりました。このほか、通夜を省いてしまう 1 日葬や、

直葬と呼ばれるものも出てきています。通夜は親族、友人らが皆で悲しみ、泣くための時間で、葬儀は故人を送る、仏式なら故人が仏様のお弟子になる儀式です。仏門に入る儀式では髪の毛を剃ってから初めて最後のお別れをして、花を入れて出棺と細かく決まっています。通夜と葬儀はそれぞれに意味があり、省略できるものではないと考えています。直葬は病院から直接火葬場に行くことで、愛知県では見られませんが、関東圏ではあるようです。費用も、最近では WEB でいろいろな情報が流れていて、比較、検討されます。葬儀斡旋業も増えてより安価に、という CM も飛び交っていますね。料金の低下は儀式の省略、簡素化につながり、ある意味で問題だと思っています。かつては町の長老の方に遺族の方がいろいろ教えてもらいながら葬儀をしたものですが、時代は変わりましたね。

—紫雲殿の運営方針など特徴を教えてください。

**近藤社長** 家族葬などが増える中、私たちはあくまで葬送儀礼にこだわっています。お葬式は当然ながらご遺族のことを考えて進めていきますので、家族葬もお引き受けしていますが、一般葬にはそれなりの意義があると考えてお勧めしています。

—一般葬の意義とは。

**近藤社長** まず、葬儀には故人さまの遺志があると考えています。人生で出会った人々、お世話になった方々とお別れをしたい、「私の生涯に付き